

「鳴く虫と郷町」20回目を開催!



行灯の灯りに浮かぶ旧岡田家住宅・酒蔵



企画会議 (キックオフ)



暗蔵2025 (旧岡田家住宅・酒蔵)



ことば蔵で記念シンポジウム開催

する。しかし、それだけで終わらないのがこの会議の良さである。たとえば一団体、または一施設では実施が難しいアイデアをマッチングさせ、実現への可能性を高めるところがこの会議の特徴でもある。そこでまた新たな出会いが生まれ、次の回の「鳴く虫と郷町」がより充実したものとなっていく。冬の会議はその年の「鳴く虫と郷町」を振り返り、反省点を共有するだけではなく面白かったものについてもピックアップし、次に繋げていく場となっている。

「鳴く虫と郷町」が紡いできた時間は「虫聴き」の歴史に到底及ぶものではないが、伊丹のまちとともに、次の世代に虫の音色に耳を傾ける楽しみを伝えていければと願うばかりだ。

■「鳴く虫と郷町」のはじまり
今では多くの市民に知られるようになった「鳴く虫と郷町」だが、少しその歩みを振り返ってみたい。「鳴く虫と郷町」が始まったのは平成18年(2006)年9月。当時、文化財である旧岡田家住宅・酒蔵と旧石橋家住宅を有していた市立伊

丹郷町館(現・市立伊丹ミュージアム)の指定管理者であった財団法人伊丹市文化振興財団(現・公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団)の職員が両住宅の活用のために企画し、昆虫館の協力を得てスタートした。当該職員は昆虫館職員と別企画ですでに交流があり、当時昆虫館の秋の定番企画展として行われていた「秋の鳴く虫」展を見て、両住宅での鳴く虫の展示を昆虫館に依頼したことからはじまった。江戸時代、酒造りで栄えた伊丹の中心であった「伊丹郷町」にある両住宅はいずれも江戸期の建築物であり、歴史ある雰囲気をもつ場所を会場とする中で伊丹郷町館の活性化を図るとともに、昆虫館としても自身の活動を中心市街地で展開できることに意義を見出し、両

者の思惑が合致した結果でもあった。
最初は伊丹郷町館での鳴く虫の展示やコンサートなどが主なイベント内容であったが、来館者から「風情を感じられる」など好評であり、また文化施設と昆虫館という異分野のコラボとしても注目され、複数のメディアで紹介されることとなった。その様子は中心市街地の各商店会の耳にも入り、2年目には複数の商店会も参加し規模が急拡大。さらに3年目以降は他の市内公共施設や個店等も加わり様々な関連イベントが実施されるようになり、平成28年には、まちづくりや地域活性化の優れた活動を表彰する「地域再生大賞」の優秀賞を受賞するに至った。コロナ禍やメイン会場である伊丹郷町館の「みやのまえ文化の郷再整備事業」による休館もあり一時的に規模が縮小するものの、令和4年(2022)年からは復活し、今回の関連イベント数は73を数えた。

「鳴く虫と郷町」の鳴く虫たち
ここで少し、「鳴く虫と郷町」の主役である鳴く虫について触れてみたい。虫についても「鳴く虫と郷町」ならではの取り組みがある。規模の拡大やイベント数の増加に伴い必要となる鳴く虫の数も増え、その確保を検討する中で、虫の採集や飼育をイベント化する試みとして「キリギリスハンター」や「スズムシ里親プロジェクト」が始まった。「キリギリスハンター」は5月下旬に、河川敷の草むらでキリギリスの幼虫を採集するイベントである。幼虫の時期は比較的捕まえやすく、家族連れでの参加も多い。「スズムシ里親プロジェクト」は会期終了後、希望者に卵の産み付けられた土とオスとメスの成虫をお渡しし、産卵ふ化を経て、育てた幼虫を翌年7月上旬に返していただくというものである。他にも多くの種類の鳴く虫が会期中展示されているが、スズムシとキリギリス以外は全て、昆虫館スタッフが採集したものである。近年は生息環境の変化により採集が困難になった虫もいるとのことで、新たな課題に直面しつつある。

もはや伊丹の秋の風物詩とも言えるイベントとなった「鳴く虫と郷町」。今年も9月5日(金)〜14日(日)の間、メイン会場である市立伊丹ミュージアム内の旧岡田家住宅・酒蔵(国指定重要文化財)や旧石橋家住宅(県指定有形文化財)、そして周辺商店街や店舗、広場、公共施設などで多彩な関連イベントが鳴く虫の音色とともに繰り広げられ、会期前後も含めると70以上のイベントが開催された。

丹郷町館(現・市立伊丹ミュージアム)の指定管理者であった財団法人伊丹市文化振興財団(現・公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団)の職員が両住宅の活用のために企画し、昆虫館の協力を得てスタートした。当該職員は昆虫館職員と別企画ですでに交流があり、当時昆虫館の秋の定番企画展として行われていた「秋の鳴く虫」展を見て、両住宅での鳴く虫の展示を昆虫館に依頼したことからはじまった。江戸時代、酒造りで栄えた伊丹の中心であった「伊丹郷町」にある両住宅はいずれも江戸期の建築物であり、歴史ある雰囲気をもつ場所を会場とする中で伊丹郷町館の活性化を図るとともに、昆虫館としても自身の活動を中心市街地で展開できることに意義を見出し、両

「鳴く虫と郷町」は主に市民や商店会、個店経営者、イベント企画会社、アーティスト、公共施設職員などからなる「鳴く虫と郷町実行委員会」が主催し運営している。実行委員会での合言葉は「ぼちぼちいこ」。規模が大きくなりイベント数も増える中、無理をすることなくできる範囲で、かつ楽しめるものを・・・という思いで活動に取り組んでいる。実行委員会はほぼ毎月行われ、イベントの振り返りや実施の方向性、次回会期、予算決算等々、運営に関することはここで決定される。会議といえども堅苦しいものではなく、各々のアイデアや希望、時には妄想であっても、気軽に意見を出し合える場となっている。そこからブラッシュアップし、次の回の「鳴く虫と郷町」が具現化されていく。また実行委員会だけではなく、毎年春(4月末〜5月上旬)と冬(12月上旬)の年2回、「鳴く虫と郷町」に関心がある方や、関連イベントの実施を希望または実施したことがある方など、各々立場の異なる人が集まって行われる「企画会議」がある。春の企画会議は「キックオフ」と言われ、その年の「鳴く虫と郷町」でのイベント案を参加者が自由に披露

する。しかし、それだけで終わらないのがこの会議の良さである。たとえば一団体、または一施設では実施が難しいアイデアをマッチングさせ、実現への可能性を高めるところがこの会議の特徴でもある。そこでまた新たな出会いが生まれ、次の回の「鳴く虫と郷町」がより充実したものとなっていく。冬の会議はその年の「鳴く虫と郷町」を振り返り、反省点を共有するだけではなく面白かったものについてもピックアップし、次に繋げていく場となっている。

また節目の回を記念して、過去に好評であったイベントを復刻したりバイバル企画のほか、「鳴く虫と郷町20回記念シンポジウム」鳴く虫と郷町のこれまでとこれから」を開催した。シンポジウムでは京都市立芸術大学学長の小山田徹氏、北海道大学講師の卓彦伶氏、鳴く虫と郷町の立ち上げ人の一人である中脇健児氏など、アーティストや博物館学の専門家、事業関係者らが、各々の視点から見た「鳴く虫と郷町」について語った。いくつかの事例を通して語られた小山田氏の「共有空間」についてのお話は、「鳴く虫と郷町」がまちと人々を繋げてきた要因の一つを的確に捉えたものと感じた。また、卓氏からは「鳴く虫と郷町」の実地調査をもとに博物館学の視点から丁寧な解説がなされたほか、20代の若い登壇者による「幼少期と大人になってからの鳴く虫と郷町への思いとその変化」は、20回続いたからこそ語ることのできる内容で興味深かった。

江戸時代に庶民の間で親しまれた、秋の鳴く虫の音色を楽しむ「虫聴き」。この風流な日本ならではの文化を現代風にアレンジして楽しむ「鳴く虫と郷町」は今回で20回目を迎えた。市立伊丹ミュージアムの太田裕也さんにその様子などについて寄稿いただいた。

最初は伊丹郷町館での鳴く虫の展示やコンサートなどが主なイベント内容であったが、来館者から「風情を感じられる」など好評であり、また文化施設と昆虫館という異分野のコラボとしても注目され、複数のメディアで紹介されることとなった。その様子は中心市街地の各商店会の耳にも入り、2年目には複数の商店会も参加し規模が急拡大。さらに3年目以降は他の市内公共施設や個店等も加わり様々な関連イベントが実施されるようになり、平成28年には、まちづくりや地域活性化の優れた活動を表彰する「地域再生大賞」の優秀賞を受賞するに至った。コロナ禍やメイン会場である伊丹郷町館の「みやのまえ文化の郷再整備事業」による休館もあり一時的に規模が縮小するものの、令和4年(2022)年からは復活し、今回の関連イベント数は73を数えた。

「鳴く虫と郷町」は主に市民や商店会、個店経営者、イベント企画会社、アーティスト、公共施設職員などからなる「鳴く虫と郷町実行委員会」が主催し運営している。実行委員会での合言葉は「ぼちぼちいこ」。規模が大きくなりイベント数も増える中、無理をすることなくできる範囲で、かつ楽しめるものを・・・という思いで活動に取り組んでいる。実行委員会はほぼ毎月行われ、イベントの振り返りや実施の方向性、次回会期、予算決算等々、運営に関することはここで決定される。会議といえども堅苦しいものではなく、各々のアイデアや希望、時には妄想であっても、気軽に意見を出し合える場となっている。そこからブラッシュアップし、次の回の「鳴く虫と郷町」が具現化されていく。また実行委員会だけではなく、毎年春(4月末〜5月上旬)と冬(12月上旬)の年2回、「鳴く虫と郷町」に関心がある方や、関連イベントの実施を希望または実施したことがある方など、各々立場の異なる人が集まって行われる「企画会議」がある。春の企画会議は「キックオフ」と言われ、その年の「鳴く虫と郷町」でのイベント案を参加者が自由に披露

する。しかし、それだけで終わらないのがこの会議の良さである。たとえば一団体、または一施設では実施が難しいアイデアをマッチングさせ、実現への可能性を高めるところがこの会議の特徴でもある。そこでまた新たな出会いが生まれ、次の回の「鳴く虫と郷町」がより充実したものとなっていく。冬の会議はその年の「鳴く虫と郷町」を振り返り、反省点を共有するだけではなく面白かったものについてもピックアップし、次に繋げていく場となっている。

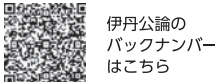
また節目の回を記念して、過去に好評であったイベントを復刻したりバイバル企画のほか、「鳴く虫と郷町20回記念シンポジウム」鳴く虫と郷町のこれまでとこれから」を開催した。シンポジウムでは京都市立芸術大学学長の小山田徹氏、北海道大学講師の卓彦伶氏、鳴く虫と郷町の立ち上げ人の一人である中脇健児氏など、アーティストや博物館学の専門家、事業関係者らが、各々の視点から見た「鳴く虫と郷町」について語った。いくつかの事例を通して語られた小山田氏の「共有空間」についてのお話は、「鳴く虫と郷町」がまちと人々を繋げてきた要因の一つを的確に捉えたものと感じた。また、卓氏からは「鳴く虫と郷町」の実地調査をもとに博物館学の視点から丁寧な解説がなされたほか、20代の若い登壇者による「幼少期と大人になってからの鳴く虫と郷町への思いとその変化」は、20回続いたからこそ語ることのできる内容で興味深かった。

郷土研究
伊丹公論

復刊
第41号
通巻 60 号

年 3 回発行

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-7-14
TEL 072・784・8170
編集
伊丹公論編集委員会



伊丹公論の
バックナンバー
はこちら

懐かしいみんなの思い出

伊丹ゆかりの思い出募集中!



EXPO'70大阪万博 オーストラリア館



伊丹市内を歩く象の行列

2025年、昭和元年(1926年)から数えて100年である。その節目の年に大阪ベイエリア夢洲にて大阪関西万博が開催されています。その昔55年前に大阪千里丘陵にて「人類の進歩と調和」のテーマでEXPO'70大阪万博が開催されました。

その頃は、伊丹市内にあったビールの王冠を作っていた会社に勤めていました。昨今は、缶ビールが主流となり瓶ビールの需要が激減し、王冠の製造も減りましたが、高度成長期、万博の数年前から「いざなぎ景気」といわれる時代で、ビンビールの需要に供給が追い付かず、毎

日残業、徹夜で王冠の製造していました。その様な時代に開催されたEXPO'70大阪万博には、全国から多くの人々が万博に来場したものです。入場者は6千400万人だったと言われ賑わいました。世界各国のパビリオンやアメリカの「月の石」を見るために

数時間待ちの行列ができました。また当時は外国人と会うことが珍しく国中から訪れた日本人は驚きました。また各国のパビリオンを回ること世界旅行ができる気分だったようです。その万博のためにタイから象が16頭やってきました。神戸港から万博会場まで40^{キロ}の道のりを歩いて移動しました。国道171号、西国街道を通り沿道には何万人もの見物客が集まったものです。暑さのために武庫川の河原で水浴びし野宿して元気を取り戻しました。私も西国街道にて象の行進を見ることができ感動したものです。

一生の中で現在と過去の万博を体験できたこと感慨深く思います。ビールの王冠を作っていた会社の思い出は、また今度。

(岡村アサ子)

伊丹見聞録 ハニー工房

地域の活性化や繋がりを大切にする

小さな空間にたくさんのハンドメイドの作品が売られている。ここは伊丹市南野にあるハニー工房。大中小のレンタルボッ

ている作家は30人。どれも個性あふれる作品ばかりだ。それだけでなく、テーブルもあり、ワンドリンクのコーヒールもお茶が



ハニー工房の藤井ルミさん(右)とハンドメイド作家の長谷川なおみさん

クス棚には、アクセサリーやスプーン、学用品、あみぐるみ、雑貨などが所狭ましく置かれている。委託販売し

無料で飲める。またアクセサリー以外にも地元で採れたハチミツや、歯科衛生士さんのお勧めの歯磨き粉や、ひめラムネを委託販売している。ここは令和元年(2019)5月に元酒屋の店舗が空いたの

で、ご主人の藤井ルミさんが、子どもや大人が楽しめるワークショップをする場所として借りた。しかしコロナ禍で少ししか教室を開けなくなり、3年後委託販売のレンタルボックスにすることにした。最初は少数の作家しかいなかったが、藤井さん

の人の人柄と横のつながりで増えていった。作家の顔が見えて、また地域の人が気軽に集える店舗となった。今回作家の長谷川なおみさんが来ていて、このように安く借りられて、気軽にお客と話がで

きる場所は、伊丹では他にないとはなしていた。最近では、藤井さんが時々

また2階にある部屋も貸室として貸し出している。月1回20分千円でリラクゼーションを行っている、Kanasoraさんは、本業は福祉職だが、この場所

は、本業は福祉職だが、この場所は雰囲気は暖かく、場所的に便利で、ここにくる参加者が優しく、リラクセスできるので続けていけるといいます。またお客さんが安らいでくれて、笑顔



Honey_koubou
インスタグラム

(細尾哲也)

伊丹俳壇

「兼題なし」坪内稔典 選
(市立伊丹ミュージアム名誉館長)

最優秀賞

吾の腕でうねる赤子が視る驟雨

平松泥沸(伊丹市)

驟雨は夕立です。「腕でうねる」がいいなあ。夕立に反応して赤ちゃんが生き生きしています。このうねる赤ちゃん、驟雨の仲間でしょうか、あるいは雷の子かも。

優秀賞

幸せに気付く仕合わせビヤホール 藤田晋一(宝塚市)
雑踏に赤きヒールや蟬時雨 睦月くらげ(埼玉県新座市)
ガラスペン夏の葉書の青い文字 竹中佳子(伊丹市)
初孫の稚鮎の匂い抱き上ぐる 大澤定男(静岡県藤枝市)
アボカドの種のころろ雲の峰 平きみえ(伊丹市)

伊丹歌壇

「レモン」尾崎まゆみ 選
(「玲瓏」編集委員。神戸新聞文芸短歌選者。現代歌人協会会員)

最優秀賞

この夏も深夜スーパードばかりで
シチリアレモンくらしいの旅情

堺紀彦(京都府長岡京市)

「シチリアレモンくらしいの旅情」が素晴らしい。忙しくて買い物も、深夜スーパードにしか行けないけれど、深夜スーパードには昼間とは違う異国感がそれとなく漂っていて、例えばシチリアレモンの匂い。ふと旅人の気分になる。

優秀賞

神さまの中にsummerがみつかって君と飲みたくなるレモネード 田中大貴(伊丹市)
たましいをうつつへ戻すために食むドライフルーツ瀬戸内レモン 睦月くらげ(埼玉県新座市)
検体の唾液を溜める数分のまなうらに立つ巨大な檸檬 芍薬(千葉市美浜区)
ひと匙のレモンの汁を暮らしにも垂らした 強い自由の匂い 友常甘酢(神奈川県横浜市)
効くのかと母に聞いたら笑うのみ輪切りのレモンずれて落ちてく 厚ヶ瀬蓮(大阪府摂津市)

今回は、俳壇の兼題はありませんが秋の自由な句とします。歌壇は「自転車」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は12月15日(必着)。最優秀賞には図書券千円を進呈。下のQRコードを利用すると、スマートフォンからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。



現代人物風景



写真協力II西田写真館

産後のことで悩んでいる母親の星
神庭仁美さん(38)

保育士、宅建、登録販売者の国家資格を持っていて、Beauty Japan NANIWA 2024 の Fashion 賞を受賞。そしてラーメン屋で働きながら、本業は産後ヨガの講師をしている異色な女性がいる。

ヨガ講師歴11年、産後ヨガ講師歴4年の神庭仁美さんは、令和2年(2020)コロナの中、産後うつになり家にこもりがちになった。そして苦しんだ経験から、同じように苦しむ人たちを元気にしたいと思い、翌年の5月に産後ヨガ講師となった。定期的な活動場所は尼崎の武庫西生涯学習プラザで、伊丹でもサンロード商店街近くのきのね写真館でも時々行っている。またNHKに産後ヨガが取り上げられ取材を受けたことがある。

保育士の資格は、産後ヨガで子どものことをもっと学びたいと思い取得した。宅建は何か学びたいと思い取得したが、家を建てるときに役立った。登録販売者(医薬品販売資格)の資格は、健康のためにヨガをするので、薬も知りたいと思い取得した。他にも珠算1級、日商簿記2級、ファイナンシャル・プランナー2級を持っている。そして放送大学の心理と教育コースを学んでいるところだ。またラーメン屋で働くのは、生活のために始めたが、今は接客が好きで元気な自分が生かせるので続けている。

またBeauty Japan とは、日本女性の美しさを評価し、社会でより活躍できる女性を発掘するコンテストで、そこに出場したのは、自らこのコン

テストに出ること、お母さん方の心にゆとりをもたらし、子どもたちが生き生きと育ち、よい未来になるという見本を示したかった。また産後ヨガが産後うつの予防になるということも広めたかった。ちなみにFashion賞は、服装や化粧など外見だけでなく、自分を彩りだしていることで受賞した。ただ残念なことに全国大会へは行けなかった。

母親の心身を整えることにより、子どもたちに良い影響を与える産後ヨガを広めるために、もっと活動の場を増やしたいと熱く語る神庭さん。明るさと元気がにじみ出ている姿は、まるで産後のことで苦しんでいる母親の希望の星に見えた。

(細尾哲也)

郷土
土産品紹介
カフェ・ド・トーヨー

伊丹市立観光物産ギャラリーには、伊丹ブレンドの名が付いた珈琲豆が販売されている。そのコーヒーを焙煎販売して

いるお店の名は、株式会社カフェ・ド・トーヨーだ。伊丹市下河原の国道171号線箕面方面沿いにある。代表取締役の大橋力武さんにお話を伺った。

北大阪東洋珈琲株式会社で24年間勤め珈琲豆の選び方から焙煎などを学び、のれんわけの形で開業したそうだ。この場所は、喫茶店



伊丹ブレンドの他に数種類の珈琲豆を販売



あまねの雲を持つ
大橋力武さん

新しい時期で、新たなニーズに答えるために取り扱いを始めた。今までの喫茶店の味も守れるよ

などに卸すには交通の便などが良いが、個人への販売などは難しくないと聞くと、もとも務めていた会社の社長さんが、ここに店を構えると決めたそう。珈琲の焙煎は、煙や香りが強いそうで、空港の近くで風が強く近所に迷惑をかけにくいとの理由だ。思わず膝を叩いてしまった。

カフェ・ド・トーヨーでは、自家焙煎珈琲豆の業務卸からOEM、企業、個人販売までしている。のれんわけした当時は、いろんな国のスタンダードの珈琲豆を価格も安くメインで扱っ

ていた。珈琲豆の卸業も、コロナ禍の影響で喫茶店の営業が厳しくなっているうえに、お米と同じように珈琲豆も価格の高騰や産地によっては品薄になっており、厳しい状況にあるとのことだった。

そんな中でも、息子さんが豊中のロマンティック街道でTaku Coffeeの名前で自家焙煎店を始めたそう。また、お店を手伝ってくれている方も珈琲店を始めるそうで、ライバルが増えるので自分も頑張らないといけないと言いつつ、嬉しそうに笑って話されていた。

伊丹の名前がついた、すっきりとした飲みながらコクのあるコーヒーを飲みたいと思われた方は、伊丹市立観光物産ギャラリーか株式会社カフェ・ド・トーヨーに足を運んでみてはいかがでしょうか。

(嘯風弄月)

いたみで ボラ活!

トーキョーコーヒー
いたみ297 いーよー
登校拒否の居場所づくり



「トーキョーコーヒー」一見すると何のグループかわからない。これは言葉遊びからとったもので、登校拒否を読むと、トーキョーコーヒーに近い発音になるので、そこから登校拒否など教育について考えるグループとなった。ちなみにこれは全国組織で、伊丹にも2か所拠点がある。

このグループの考え方は、不登校の子どもは、問題児でも落ちこぼれでもない。問題は子どもが不登校ではなく、大人の無理解という視点からという考えをもつ。そのため大人が楽しむ空間こそが子どもにとって最高の居場所。そのため押し付けられず、一緒に同じ空間で好きなことをしている。



トーキョーコーヒー
いたみ 297 いーよー
Instagram

これからはもっとこの活動を知ってもらい、必要な人に情報を届けるために、広報活動も工夫していきたいと話していた。

(細尾哲也)

